
ひなた荘はナギの如く！

仕神けいた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひなた荘はナギの如く！

【Nコード】

N8840A

【作者名】

仕神けいた

【あらすじ】

学校モノでギャグモノで短編モノ。支離滅裂で意味不明といつてしまえばそれまでのものだったり。ひなた荘の住人たちの日常生活日記みたいなモノです。

簡単だけどテキトーじゃない人物紹介（前書き）

ナギ「おっとと。ここは私たちの紹介コーナースよ」

簡単だけどテキトーじゃない人物紹介

【総寮寺ナギ】

ひなた荘一階103号室

誕生日／7月23日

アニマルマニア占い／黒ひょう

17歳の高校二年生。名実ともにお年頃のオンナノコ。
最強説あり。「ゝッス」が口癖である。

クラスは2年4組。部活はデザイン部。外見は、中途半端な高さのポニーテール。両横髪は癖っ毛で、外側に向かってはねている。

【ウィル〓クロカ〓スリーワラ】

ひなた荘二階202号室。階段側の部屋

誕生日／6月12日

アニマルマニア占い／ひつじ

若干12歳にして天才少年。

現在高校一年へ飛び級している。

無邪気だが、悪く言えばやかましい。金髪青目の、生粋のアメリカ人。愛称「クロカ」。

クラスは1年4組。帰宅部。ナギのことを「ナギおねーちゃん」と呼んで親しんでいる。

【リシギ】

ひなた荘二階203号室

誕生日／11月8日

アニマルマニア占い／ペガサス

18歳の無口な青年。

中国人の母と日本人の父を持つハーフ。趣味はバイクツーリング。ウェーブがかった黒髪で、ひなた荘の中では一番の長身。

愛称「リシギ」。クラスは3年6組で部活は剣道部。バイトをしている。

【秋良ユキタダ】

ひなた荘二階204号室。一番奥の部屋

誕生日/2月28日

アニマルマニア占い/狼

17歳で高校二年生。パソコンオタク。

最近ひなた荘にやってきた。さまざまな特許をとり、個人資産も長者番付に入るほど。

毎日、何かの研究改造を行い、ひなた荘の電気代も彼がダントツの一位。クラスは2年4組。

部活は世界情報網検索見聞兼機械語開発部、省略してパソコン部。部員は現在彼一人。

【真田キョーゴ】

誕生日/1月30日

アニマルマニア占い/ライオン

28歳の、もういい年のお兄さん。

何か抱いていないと気がすまないらしく、よくヒナタを抱いてうるちよろしている。ヒナタがいないときは、本当に何でもいいから手にとって抱いている。

愛称「キョーゴさん」。

敬語を基盤とした喋り方をするが、怒ったりすると、めちゃくちゃな訛りになる。

【ヒナタ】

?歳。ひなた荘で飼われているぶた猫。キョーゴが飼い主。3万匹に1匹の確立で生まれた珍しいオスの三毛猫。

記念すべき第1話！って、何で主役が出ないのさ（汗）

がらっちゃ……

クロカがナギの部屋で本を取った瞬間、腕が棚にぶつかった。そのはずみで何かが落ちてきた。

「あ、落っこしちゃった！」

クロカは、流暢であるが、まだマスターしきれていない日本語で落下を叫ぶ。

金髪碧眼で、小学校低学年にして大学を卒業している天才少年のクロカ。彼は慌てて、本棚に立てかけたはしごを飛び降り、両手で大きな箱を手にとった。

箱には、白地のパッケージに黒で『GAME BAY』という文字。その下には携帯ゲーム機の写真が載っている。

「？」

軽く振ってみると、中でガチャガチャと音がした。

「なあに、これ？」

「クロカくん、『ホームズの帰還』取ってくれましたかー？」
廊下からの声がする。

「キヨーゴさん」

クロカが顔を覗かせると、二十代も半ばの男が猫を抱きかかえて待っていた。

クロカは、とりあえず頼まれて棚から取り出した本と、さっきの箱を持ってナギの部屋をあとにした。

「クロカ君、ありました？」

「うん、あったよ。はいコレ」

言って、本を手渡すと、クロカはずいっと箱を彼に見せた。

「？ どうしました？」

「ねえキョーゴさん、これ、なあに？」

「……？ ああ、これはゲームベイですね」

キョーゴが箱に書かれた文字をみて言う。しかしクロカは納得できない表情だった。

「えー！？ だってゲームベイってこんくらいのサイズだよ。こんなにへんな色じゃないよ？」

クロカは親指と人差し指をクイツと広げて、ゲーム機の小ささを主張する。

「うーん、これはたぶん一番最初の頃のゲームベイでしょう。昔はこんなに大きかったんですねえ。」

「どうしたんです、これ？」

「あ、うん。これね、本を取ったとき棚から落ちてきたの。それだなにかなーと思って」

クロカはニツコリ応えた。キョーゴもつられてにつこりする。

「なるほど。そういえば、ナギさんはお兄さんからもらったゲーム機をすごく大切にしましたねえ。なつか……しい……」

「……………」

二人の間に沈黙が落ちる。

「……………クロカ、君……………」

これ、落ちてきたって……………」

「うん、ガチャツて落ちてきたの。中にゲーム入ってるのかな？」
何も考えていない顔で、なおも箱をガチャガチャと振った。

興味半分で振られる箱を目の前に、キョーゴの血の気はどんどん失われていった。

「ねーねー、ボクこのゲームベイ見てみたい。開けてみていいかな？」

どんなに暗く重い空気でも、一瞬で華やいだものに変えてしまい
そんな笑顔のクロカ。キョーゴは青い顔で、しかし笑顔につられて
笑った。

「……私やあんまり見たくないです……」

「え？　なんで？」

不思議そうに訊ねるクロカに、キョーゴは箱を指さしながら言う。

「クロカ君……………それ、棚から落ちてきたんでしょう？」

「うん」

「そのゲームベイ、ナギさんがものすごく大切にしてたやつです
よ？」

「……………うん」

クロカの表情が少し硬くなった。

「……………落ちたんでしょう？」

「……………うん……………」

再び沈黙。

「……………それじゃ私やこれで」

「待ってよう！」

くるりと体を百八十度回転させ、逃げよつとするキョーゴに慌てずがりつく。

「ひいつ！ お願いだから巻き込まないでくださいいゝ！！」

「ボ、ボ、ボクだって一人でナギおねーちゃんに怒られるの怖いよお！ キョーゴさん一緒に謝ろうよう！」

「ダツダメですってば！ クロ力君、ナギさんの性格わかってないからそんなこと言えるんですよ！」

キョーゴは、脚にへばりついて離れないクロ力をなんとかひっぺがし、耳を貸すよう合図した。

「こ、このことは絶対、誰にも言っちゃダメですよ！」

「なんでさ……？ 秘密にするの一番イケイケなんだよ？」

「それをいうなら『いけない』でしょ！ じゃなくって、ダメですってば！

私が前にナギさんから借りた本を、間違つて一ページ折り目をつけてしまったとき、素直に土下座して謝っても×××で
さ
れて、そのまま▲▲▲▲▲▲だったんですから……！」

「ごくりとクロ力の喉が鳴る。

「……それ、ホント？」

「だーから言ってるんです。いいですか、絶対内緒で——」

「なにが内緒だった？」

『どあひゃあいいいいいい！？』

どたぶあどうあどどだあん

あまりの驚きに、クロ力はナギの部屋に慌ててこもり、キョーゴに至っては階段から落ちそうになっていた。

「なに、やってんだ？」

二人の行動に、逆に驚きを隠せない声の主。キョーゴがうつかり放ってしまった白い太り気味の猫をキャッチして大あくびをした。

「……………リシギ…………？」

呼ばれた相手は、キョーゴより少し高い身の丈に、黒いつやつやしたゆるやか天然パーマの髪。まだ眠そうな黒い瞳をこすりながら、猫をうつ伏せ倒れになったキョーゴの背中においた。

「なあ、キョーゴさん、ヒナタはメシ食ってないのか？ 今朝、オレの部屋来て、いきなり手え噛まれたんだけど」

キョーゴの背中中、猫のヒナタがナアゝゴと一鳴きする。

「え？ ヒナタが？」

おつかしいですねえ、ご飯はきちんとあげたはずですよ。ユキタダ君が引き受けてくれたし、猫缶も確かに今日の分は捨ててあったし…………」

「ふーん じゃ、足らなかったのか？」

「そんなこと言っちゃ、また太っちゃいますよ。でも、ヒナタ！ ダメじゃないですか、腕なんか食べちゃダメでしょう！ 病気にでもなったらどーすんですか？」

「腕なんか……………うつ！？」

リシギは、腰に急な衝撃を受けた。

「リシギいゝ！ これ、直しようゝゝゝゝ！」

見ればクロカがボロぐしゃな泣き顔で、彼に箱を突き出している。

「なんだそれ？ プラモか？」

「チガウよう！ ゲーム機だようゝ！」

でかでかと書かれた「GAME BAY」の文字なぞ見もせず、彼は箱を取って中を開けてみた。

すると、ゲームベイらしきものが、箱の中でバラバラの部品状態で入っていた。

「なんだこれ！？ メチャクチャじゃねーか。こんな直せねーだろ」

「……………そんなぁ……………」

その一言に、クロカは燃え尽きた灰のようになって崩れ去ってしまった。

「どっちにしても、プラモじゃねーならオレには無理だ。ほい、返す」

箱をクロカに押し付けて、自分はその場から逃げようとした。が、

パキシ

「痛っ……………！」

硬い物を踏んでしまったらしい。渴いた音が響いた。

足元に何があったかと、リシギが足を上げてみると、そこにはプラスチックの破片が転がっていた。

見覚えがある。

ついさっき、バラバラになっていたゲーム機の破片だった。

「なんだ？ さっきのでこぼれ落ちたのか？」

拾おうとすると刺さる視線を感じ、ふいと見上げるとニヤリと笑うキョーゴとクロカがいた。

クロカの持つ箱は開いており、箱の中からプラスチック破片を取り出していた。

「踏んだね」

「踏んだね」

ニタリとリシギを見る。

「……おい」

「リシギも、これで共犯者だね」

「ナギさんのゲームベイ、踏んで壊しちゃったんですしね」

二人は一步彼に近づいた。

「ちょ……なんだと!？」

「キーミとおボクとは……いいーちねーんたーくしよ」

「こーこで会ったがあーうーんのーつきい」

二人はさらに一步近づく。

「ま、待てよ！ 何だよ！ オレはヒナタが——って、わあああああああああ！」

特に意味もないまま詰め寄られて、しまいには二人に押しつぶされてしまった。

「――ようは、ナギの大切なもんを直しやいいんだろ？」

懐中電灯ひとつしかない暗闇の中、リシギの声が言った。

「直せるの？」

今度は、クロ力が驚きの声で訊ねる。すると、リシギはあっけらかんと、

「アロナルフアでくつつけりやいいじゃん」

「バラバラになってるんですよ！？ そんなのすぐバれますって！」

リシギの提案に反対をするは、キョーゴの声。

「くつつきやなんとかなるだろ」

三人とも、とにかくナギに見つからないようにと物置の中で作戦会議を開いていた。

「ねえ、ここ狭いよー。暗いよー」

クロ力がブーイングする。

当然だった。物置は狭く暗く、しかも扇風機やらパソコン機器やら、やたら機械の先客がたくさんあった。大人二人と子供一人が入れば身動き取れない状態になるのは見ずとも明らかだ。

「しっ！ 見つかったらどーすんですか!？」

「だって……！ うあゝん、せーまーいいゝ」

「黙れつつってんだろ！」

「リシギ君もうるさいですって！」

押入れの中でダンボールをテーブル代わりにして、その上においてゲームベ이의箱を囲んでいる。

「じゃ、修理はじめるぞ」

慎重に箱の中から破片を取り出すリシギ。そして残る二人は、その破片を丁寧にならべていった。

「……ん？」

箱の中に、手のひら大の塊をみつけた。リシギが取り出すと、それはゲームベイ本体だった。

「なんだ？ ゲーム壊れてないじゃんか」

『え？』

懐中電灯に照らして、よくよくみると、ディスプレイカバーが外れている以外は、どこも破損している様子はなかった。

「えー？ じゃあ、このバラバラのパーツはなんなのー？」

「あー！ クロカ！ せっかく並べたのに……」

キョーゴがいい終わらぬうちに、クロカは並べた欠片をぐちゃぐちゃにしまった。

「欠片は多分、ナギがテキトーに放り込んだんだろ。カバー外れてるだけでよかったじゃんか」

「うん、まあ……」

リシギは丁寧な埃を取り払い、接着剤でぺたりとカバーを貼り付

けた。

「今日一日くらい置いとけばくつつくはずだ。触んなよ、それまでは」

「触んないよ」

「むしろ、ナギさんがそれを見つけないかが問題ですよね」

一同、ゴクリと唾を飲み込む。

「ね、ねえ……これ、早く元の場所に戻しておいた方がいいんじゃない？」

クロカが急かすと、キョーゴとリシギも同感だと頷く。

慎重に慎重にゲームを箱に収め、ガラクタも一緒にいれて、押入れの襖を開けようとリシギが手を伸ばしたとき、

ガラガラガラン

襖がひとりでに開いた。

『！？』

外からの光に、一番前にいたリシギは目を細める。今日の天気はくもりだし、昼中だから電灯もついていなかったが、真っ暗闇の中にいた三人にとっては眩く感じられた。

——ナギに殺される……………！

のちに語られたことだが、それぞれの脳裏にはただそれひとつだ

けが浮かび、若くして思い出の走馬灯を見たという。

とにかく、ホラー漫画の恐怖のシーンよろしく三人はナギに見つかったと思い、表情が驚きと恐怖で引きつってしまった。

「うわぁ!？」

覗き込んだ影は、覗き込んだところにそんな表情が三つもあって、悲鳴を上げて思わず飛び退いた。

「おまえら！ 僕の部屋でなに百物語まがいなことしてんだよ!？」

「……………え？」

「ユキ……タダ？」

そこで腰を抜かしていたのは、この部屋の主、秋良ユキタダ。

そういえば、唯一ナギが入室を禁じられているのは、ユキタダの部屋であり、彼女に見つかることなく作戦会議ができるとキョーゴが提案したのだった。

狭い押入れから出て、三人がユキタダに説明すると、

「ああ、そういえば修理頼まれてたんだった。ディスプレイのところが壊れたから直してくれって」

「……………へ?」

「でもそれもリシギたちが直してくれたんだろ？ 助かったよ、手間が省けて。彼女には僕からうまく言っというてあげるよ」

「な……なぁんだ……」

風船から空気が抜けていくように、三人はヘナヘナとへたり込んだ。

「最初っから壊れてたんだ……」

「寿命が縮みましたね」

「ボクも慌てて損しちゃったよぉー！」

クロカが腕を高くあげ、大きく伸びをした。

「あっ……………」

ユキタダが声を上げたときには、クロカの手からゲームベイの箱が宙高く舞っていた。

皆が見ている先で、箱はゆっくりと落下し、

……ガツチャシャン

「……………」

沈黙が見守る中、確実な破壊の音で着地した。

「……………」

このあと、持ち主が学校から帰ってくるのだが、真実を知り、怒り狂ったナギによって、またひとつ破壊伝説が生まれたと、ご近所でうわさが絶えることがなかった……らしい。

いくぞ第2話！こんなもの、一体誰が使うのさ？（前）

ひなた荘のみんなは、バカがつくほど健康ツス。

あ、でもキョーゴさんは、クロカが窓ガラス割った時とかよく頭痛薬飲んでるツス。あと、リシギやユキタダが、バイクで溝に落ちたり、爆発でコゲ炭になった時にもキズ薬を使ってるツスよ。

その程度だけだと思っていたのに、ひなた荘にあるわけがないと思っていた薬が潜んでいたツス。

——ナギ、後日談より

ある日曜日の昼下がり。

ひなた荘一階リビングには、薬棚がある。ひなた荘の誰かが風邪をひいたりケガをしたり頭が痛い時、その棚から必要な薬を使えるようにと、普段から共有しているのだ。

ちなみに、薬は『薬師のヤマフジ』という人から常に補充されるので、不足する事はほとんどない。

そんな棚の目の前を通り過ぎて、ナギは実家から送られてきた荷物を重たそうに自分の部屋へと持っていた。

「イッタタタ……けっこー深く切っちゃったんスカね」

ナギは、左の人差し指をくわえながらリビングへと下りてきた。実家からの荷物を開ける際、カッターで指を切ったようだ。

「えーと、バンソーコーバンソーコー……」

彼女が薬棚を引っ掻き回し、それと思しき箱を取り出した。

「あーあつた。これこ……………」
言葉が途中で切れた彼女は、一瞬で表情が歪み、その箱に書かれていることに見入った。

足 さわやか指間パッド

(滅菌済)

足 満足 いつも清潔

足元サラサラ!!

水虫でお悩みのあなたに
おすすめ!

「……………2サイズ入、粘着シート付……………」

その箱をしばらく呆然と見ていた彼女の脳裏には、日頃共有して使っているトイレのスリッパや風呂、果ては庭へ出る際のサンダルが浮かびあがっていく。

直後、ひなた荘を中心に、近所中に悲鳴が轟いた。

「み、みっ……………」

水虫患者がひなた荘にいるッスうううつつつつ!!」

いくぞ第2話！こんなもの、一体誰が使っのさ？（後）

いやあ……最近は、出かけるときに靴を履くことが多くなりました、いや、あたしは普段ゲタなんですよ。散歩の時や買い物の時とか。でも、ナギさんたちがダサイと言って、あたしの誕生日に靴を買ってくれたんです。

で、せっかくだからと靴を履いているんですが………靴って結構暑くてムれるんですね。

——靴に履き替えたキョーゴ談

その日の昼下がり、キョーゴは白いボタンシャツにクロのコットンパンツといった普段の洋装で、靴下片手にリビングへやってきた。平日のリビングには誰もいない。彼は別段気にする風もなく、リビングにある薬棚をあけた。ケガなどどこにもないように見えるが、彼は薬棚の中にあつた小さな箱を取り出した。

足 さわやか指間パッド

（滅菌済）

「ふー、どうにもこれがないと、気持ち悪いんですよえ」
キョーゴは箱から中身を出した。

「見たゾ」

「!？」

彼の背後から黒い声が響いた。
キョーゴが振り向く刹那、同時に飛び出した四つの影に、彼はな

す術なく取り押さえられてしまった。

「な？ な……！？ 一体なんですかあゝ！？」

「キョーゴ！ 見たよっ！」

声はクロカのものだ。

「まさかと思ったけど、本当にキョーゴさんだったなんてね！」

信じがたい、とても言っているような声音はユキタダだ。

「……………やっぱり」

ボソリとリシギ。

「キョーゴさん！ 観念するツスよ！ ネタはあがってんスからね
！」

どこかの刑事ドラマで聞いた口調で、ナギがキョーゴの手から箱を奪う。

「何スかこの水虫用の薬は！！」

「は？」

「さつさと病院に行くんだキョーゴさん！」

「え？」

『水虫ゲキタイ〜〜〜〜！！』

「ち、違いますってー！ 私は水虫なんかじゃ——」

「キョーゴ！ 説得力ゼンゼン nothing！」

そうして、悪の根源は無事絶たれたツス。

晴れてめでたしめでたしツス。

その後数日、キョーゴは何度も説明を繰り返すが、なかなか信じてもらえず寂しい思いをしたという。

閑話休題！和気あいあい？休憩中のひなた荘

総寮寺ナギ（以下ナ）

「さあてさて！ 携帯小説ではじめた『ひなた荘はナギの如く！』。今回はその紹介ということで、まずはみんなの自己紹介からはじめるッスよ！」

クロカ（以下ク）

「わあい♪ ジコシヨーカシヨーカ♪ なんの栄養を吸収するの？」

リシギ（以下リ）

「……………」

真田キヨーゴ（以下キ）

「クロカ君……それ言うなら『消化』じゃなくて『自己紹介』ですよ」

ク「へ？ どう違うの？」

秋良ユキタダ（以下ユ）

「全然違うじゃないか。今時オヤジギャグでもウケないぞ、それ」

ク「おやぢギャグ！ 親自虐♪」

（一陣の風が吹いて、空気が一瞬にして凍る）

一同「……………」

ナ「とりあえず！ はじめるッス！」

まずは主人公たる私、総寮寺ナギ。高校2年の17歳」

ク「ぴっちぴちのジヨシコーサーだね♪」

ナ「……クロカ……古いッス

そ、そいで、ひなた荘の103号室に下宿していて、自他共に認める最強の女子高生ッス！」

ユ「そうそう、前から訊きたかったんだけど、どういう意味で最強なのさ？」

ナ「いろいろッスよ」

ユ「……そですか」

ナ「次は――」

ク「ボク」　ボクが先ボクが先――！

ユ「押すなよクロカ！　わかってるって！」

ク「ボク、クロカだよ。本名は『ウィル・クロカ・スリーワラ』。12歳だけど高校1年生なんだよ。」

アメリカでね、えつと、なんていう大学だっけ？　あ、そうそう、ハーバードの大学院に行ってたんだ。ハーバード・ロー・スクールの。

父さんたちはお医者さんにしたがってたけど、法律を学ぶ方が面白かったから、表向きはメディカルに通って、HLSには内緒で行ってたんだ」

キ「もしかして、掛け持ち！？」

リ「……」

ユ「できるはずないだろ、普通……」

ク「うん、だからちよこつとだけジマーン」　すごいでしょ？」

ユ「ちよこつとすごいってレベルなのか？　頭の構造が違うヤツはわかんねえ……」

リ「……（人のこと言えてない）」

ユ「ん？　リシギ、なんか言ったのか？」

リ「……」

（首を横に振るリシギ）

ク「でね、日本の法律も勉強したくって『日本語を身近に学ぶ』って名目で留学したんだよ。」

あ、ちなみにボクはひなた荘の202号室の下宿なんだ。

ハイ、次ユキタダ」

ユ「え？　あ、ああ。えと、僕は秋良ユキタダ。」

高2の17歳。このひなた荘に来たのはほんのつい最近かな。この中では一番日が浅いんだ。

クロカほどでもないけど、僕だっているんな特許を持っていて、

資産だつてすごいんだぞ」

ク「資産家長老番付ベスト10に入ってるもんね」

ユ「資産家『長者』番付だ！ 年取つてたまるかつ！」

ナ「へえ、一番の長生きつていたい何歳なんスカねー？」

ユ「ナギさんまで！？」

リ「122歳164日。フランス人」

ク「わあ！ すっごーい！」

キ「ギネスブックに載っている、公式記録史上最も長生きした人だ
そうですよ」

ク「ギネスだギネスー！」

ナ「じゃあベスト10に入るユキタダもああみえて……」

（一同、ユキタダをじつと見つめる）

ユ「な、なんだよ！ 僕は化け物かつ！？ もういい！ 次、リシ
ギいけよ！」

リ「……………」

ユ「なんか喋れっ！」

リ「リシギ。18。部屋は203号」

ナ「少なさ……………リ、リシギ、もちよつと喋つてくれると助かる
んすが……………」

ク「そうそう。たとえば名前の由来とか、部活とか」

リ「……由来は……聞いてない。父が日本人だけど、オレは母方の
家で育てられたから、母方の姓を名乗ってる」

キ「そうなんですか。確かに『リシギ』という名前は日本であまり
聞かないですね」

リ「吏^リが苗字で志儀^{シギ}が名前。でも、『リシギ』の方が呼びやすいだ
ろ？」

ク「うん、リシギリシギリシギリシギー！」

ユ「舌噛むぞ」

ク「もう噛んだ！ 痛いー！」

ユ「……………」

ナ「そんでもって、このひなた荘の管理人、キョーゴさんの自己紹介。どぞ」

キ「な、なんか改まって言うと気恥ずかしいですね。え〜と……名前、でしたっけ？」

ク「キョーゴさん緊張しすぎ」

キ「仕方ないじゃないですか。こういうのは小学校以来なんですから」。

え、えとー、名前は、真田キョーゴといいます。ひなた荘の管理人でして、今は学生さんたちに部屋をお貸ししています。

あ、あとこっちは猫のヒナタです。私の猫でして、ちょっと大きくなりすぎちゃったけどかわいい三毛猫なんですよー」

ナ「キョーゴさん、自分の紹介で猫を紹介してどーすんですか」

キ「だってかわいいじゃないですか。それにヒナタは三毛猫なのにオスなんですよ」

ク「ヒナタかわいいよ」

ユ「確かに珍しいよな、三毛でオスなんて」

リ「オスの三毛猫は福を呼ぶ……」

キ「うちのマスコットの存在ですよね」

ヒナタ「ふにゃあ〜！」

（キョーゴ、ヒナタに頬擦りするが、逆に引っかかれる）

キ「ヒ、ヒナタ……痛いですよ」

ク「うわー……ほっぺに三本線」

ナ「ええつと……」

てなわけで、こういう面々がひなた荘に住んでるッス。自己紹介はここまで！ お開きに——」

ユ「（いいのか、こんな中途半端な終わり方——）」

ベキシッ

ナ「虫がちよつと飛んでたッスね。

また次回にでもひなた荘の紹介をしていきます——」

リ「（次回もやんのか……）」

ドガシッ

ナ「まだ虫がうるさかったッスね。

もう大丈夫。それではまたの機会に」

（無残に転がるユキタダとリシギ。それを覗き込むクロカ）

ク「うわぁ……

ユキタダ、リシギ、大丈夫？」

ユ「っ、つつくなクロカ……」

リ「『最強』というより『最凶』だな……」

（ナギがピクリとする）

ナ「最近の虫が良く飛び回る季節になったッスね。ハエ叩きじゃ追いつかないッスよ」

（その手には強力殺虫剤と渦巻き蚊取り線香が……）

ユ・リ「げっ！ ちよっ……」

（以下、ちよっと割愛）

キ「そ、それじゃまたの機会に！（早く幕を下ろして！）」

（キヨーゴに急かされる黒子。そして——幕）

いくぞ第3話！今さらか？ノストラダムスの大予言！

オレが知ってるといえば、ミシエイル・ド・ノートルダム……ええつと、ノストラダムスの書いた予言詩集『諸世紀』、あれの第十卷七十二番に載ってるやつだな。ホラ、恐怖の大王で有名なやつ。

一九九九年 七月

恐怖の大王が空から降ってくるだろう

アングルモアの大王を蘇らせるために

その前後の機関、マルスは幸福の名のもとに支配するだろう

オレが読んだ本では、そう訳されてた。

ノストラダムス本人は

「私にもわからないもの。強いていえば、何でもないものが降り、それによってすべては消え、失われ、もとのかたちをとどめなくなる」

っていう趣旨で予言を説明してたらしい。

でもよく考えたら、この予言が書かれたの500年も昔だろ。

その時のフランス語って綴りとか発音とか、意味も現在のフランス語と違ってくるだろうし、大体、詩なんてモンは読み手が違えば詩の感じ方だって変わってくるもんだとオレは思う。

実際、恐怖の大王はイエス・キリストで、再臨の前兆に最大級の破滅があつて、それを免れた人たちを、キリストが救うとかいつている人だっている。

オレは予言とか興味ないけど、この予言詩、意味も解釈が幅広く過ぎて予言になっちゃいねーと思う。

——リシギの、予言に対する見解より

「ランメルヌフサン」 ノナントヌフ」 セットモア
デュシエル」 ヴィア」ンドラ」 アングラ」ンロワ
あ」 デスフレイヤール」

レシユスイ」ティ」 ルグランロ」ウ ダ」ンゴ」ルモワ」
アヴァ」ン」 エ」 アプレアプ」レ」 マル」ス」 レニイ」
エ」 ペルボナ」ール」

「……クロカ、頭のどこをぶつけたんスカ？」

くるくる踊りながらリビングに入ってきた彼に対して、ナギはま
ず呆れと心配と哀れみを含んだ一言を放った。もう少しで、ポット
一杯に作った紅茶を滑り落とすところだった。

ステッキこそ持っていないものの、小さい頃に憧れていた魔法少
女アニメを想像させるような今の彼は、表情もほがらかに、頭から
花が笑顔で咲きほころびそうで——つまりはイッてしまっている。

こつちの世界に帰ってすることは難しいだろう。

「なあ」になにに、ナギねーちゃん？ ボクならだーいじょー
うぶだよあ？」

もはや帰還不可能だ。

そこへ、小腹をすかせたりシギとユキタダもリビングに入っ
てきた。

「腹減った」

「ナギさん、なんか食べるもん——」

当然二人もクロカのア水面にしばし沈黙を強いられる。

「……ナギ、これは壊れたのか？」

と、リシギ。

「いやいや、これはきつと『クロカほがらか現象』だね」

と、クロカをじーっと見つめてユキタダは分析した。

——なんじゃそれ？

と、思ったのが顔に出たらしく、ユキタダはナギを見て説明し始
めた。

「特に意味のない、なんでもないことで気分が上昇する……つまり

は、クロ力特有のホルモンが分泌されてるんだろつと僕のデータではそう分析されているんだ」

「ミモフタもない説明だな」

「けど、クロ力ならそーゆーのありそうッスね……」

三人でイツてしまったクロ力を見てみると、リシギがふと何かに気付いた。

「クロ力、そのヘンな歌——」

「ヘンじゃないヨ！ ボクが作曲した『ふにゆらかノストラダムス』っていう歌なんだよ！」

「あー……やっぱり」

「？」

「????」

一人納得のリシギ。ナギとユキタダは話の展開もわからず置いてけぼりを食らう。

「やっぱりつて、何がやっぱりなんスか？」

「あ、なるほど！ どつかで聞いたことあると思ったら」

頭上に豆電球を光らせて、ユキタダも状況を理解したようだ。

「だから何が？」

ナギはじれったそうにユキタダのメガネを引っ張った。

「ぬああ！ な、なにするんだよ！」

「いいからさっさと教えるッス」

「……クロ力はノストラダムスの予言を歌ってるんだよ。すごくメチャクチャな音階だけど」

「へ？」

「紅茶に砂糖は入れてあるッスからね」

テーブルに並んだカップから、紅茶の深みある香りが漂う。

ナギがそれぞれの席にそれを配りながら訊ねる。

「それで、何で予言を歌うんスか？ ワケわかんないツスよ」

「だからそれは『ふにゆらか節現象』のせいだよ。まったく、頭のネジでもゆるんでるんじゃない？」

——最初に言っただのと違ってるツス……

彼の方こそ頭のネジが緩んでしまったのだらうと、ナギはユキタダの紅茶を没収し、かわりにバファリンを箱ごと彼の口に詰め込んでみた。

それから、テーブルを囲んでの団欒が始まった。

「でも古いな。クロカが歌ってたの、1999年の大予言ってヤツだろ？」

リシギは、紅茶に手もつけようとしなくて言う。

「そりゃ古いツスね。ハルマゲドンとかアングルモアとかツスね」

「そうそう！ 『キョーフーの大王』がふってくるの〜！」

「今どき恐怖の大王なんて、非科学的にも程があるよ」

ユキタダは必死こいてバファリンを吐き出したが、口に入れていた時間が長かったのか、頬が伸びきっていた。

「——恐怖の大王といえば、ナギさんですねえ」

『うわっ！？』

「キョーゴさん！？」

いつの間に入ってきたのか、キョーゴさんがテーブルでまったりと自分専用マグカップに紅茶を注いでいた。両隣に座っていたユキタダとリシギも気付いていなかったようで、驚きの声を上げた。

「ねえねえキョーゴお〜、ナギおねーちゃんがキョーフーの大王になるの〜？」

「キョーフーじゃなくて、恐怖ですよクロカ君」

「キョー……フ、キョーフ。キョーフう〜」

再びイッてしまったクロカ。

ナギはそれを押しのけ反論する。

「ちよい待ちキョーゴさん！！　なんで私が恐怖の大王なんスか！？」

「いやもー、子供の頃あたしがナギのおやつを間違つて食べたときなんか、まさに恐怖の大王……」

「なんスかそれ！？ 子供の頃の話じゃないスか！ 今はそんな事では怒らないツスよ！」

「そうだよキヨーゴ。ナギおねーちゃん、怒んないよう。おねーちゃんは優しいんだよ！ この間のおやつ、ボクひっくり返しちゃったの、一生ケンメ拾ったやつ、ナギはボクにくれたんだよ！」

「クロカ……あのケーキ食べたンスか……？」

「え？ だつておねーちゃんいらないうって言っただじゃん。おいしかつたよ」

「いや、確かにいらないうとは……腹、壊すツスよ？」

「……クロカ君の場合は別として、食べ物への恨みは今も昔も変わらないとあたしや思うんすがねえ」

『え？』

ボソリと言ったキヨーゴの一言を、ユキタダとリシギはその耳でしつかり聞いた。

彼は、テーブルに置いてある紅茶をコクンと一口飲む。

「……」

「さてと」

ナギはテーブルを離れ、キッチンへと消える。直後にキヨーゴが景気よく紅茶を嘔き出した。

「ど、どうしたのキヨーゴさん！？」

「……汚え」

目の前に座っていたリシギは、攻撃が命中して、見事紅茶まみれになった。

「しょ……しょっぱい！」

口をしわしわにしたキヨーゴは、ティーポットの横にあるビンに『塩』と書かれているのを目撃した。

そして、キッチンに行ったナギはというと、

「あああああああ！」

「どーした!？」

「ナギ!？」

彼女の叫びに反応して、慌ててキッチンへなだれ込むキョーゴたち。

彼女は、開けっ放しにした冷蔵庫の前で、ガクガクと肩を震わせ、今にも泣きそうな顔で彼らを見る。

「わ、私の……私のあつぷるぱいがないい」

『アップルパイ?』

「——って、昨日のおやつだった?」

「うん」

「ナギおねーちゃん、昨日食べなかったの?」

「昨日は食べる時間なかったから残しておいたんス」

「あれナギのだったの? あまりものかと思って、オレが食っちゃった」

「そうッス、ユキタダが食べ——」

そのとき、一瞬だったが、確かに時間は止まった。

ピキリ

例えれば、それはガラスにヒビが入ったような音だった。

その音が、ナギのこめかみ辺りから聞こえてきたなんて、その場にいた誰が知り得ようか。

1999年7月、あるいは8月、もしくは12月。2000年の7月。ミケア宗教会議の年、325年を基準にした1999年後。

ノストラダムスの予言の年は、様々な説が存在するが、ひなた荘の恐怖の大王は、予言を無視し、たった今、降臨した。

いくよ第4話！ 夏休み、国語の宿題大変だい！

本人は全て英語思考ですが、都合上、日本語訳させていただいております。

八月二十八日

今日もなかなかの天気。雨が降りそうだけでもギリちょんで降らない雲が空を覆ってる。先週に比べればいい天気だなあゝなんて思う。

先週……あれはひどかった。

朝、晴れ間が少し見えていたと思うと、ものすごい速さで雲が流れて、あっという間にザザ降り雨。バケツなんてもんじゃなくて、滝にうたれている気分になれるくらい強くて激しい雨。午後になっても余計ひどくなるばかりで、雷も雨みたいにかくさん光って、轟いて、落ちてた。

昼間なのに、夜みたいにあっくらと暗くて、明かりをつけなきゃ字も書けなかった。

ここ、ひなた荘はあちこちが傷んでいるから、雨に打ち壊されるんじゃないかってすんごく心配したんだ。

ひなた荘に雷が落ちなくてホントよかった。

でもそのかわり、ボクの部屋もみんなの部屋も、コップやバケツや洗面器が床一面に敷き詰められるハメになっちゃった。

ボクは『これが異常気象かあ』と感心して眺めていた。

——国語の宿題だけやっていないクロカの心情より

ボクは生まれも育ちもアメリカだったから、日本に来てまず困ったのが言葉でのコミュニケーション。

いくらジェスチャーができて、それには限界があつた。
とにかくにも、その国の言葉を覚えなければ、いつまでたつても会話なんてできるわけないと思つたから、ボクは最初に『これは何?』という日本語を覚えて、わからないものを指さしては尋ねるようになった。

それから――

日本に来て1年半の今、会話するのに不自由はしなくなつたけど、まだまだボクの知らない日本語はたくさんある。
もつともつとたくさん言葉を覚えたいんだ。
ボクにはちょうど、国語の単語調べが夏休みの宿題に出されているから、キヨーゴさんに教わつた方法を試して、日本語を覚えてみることにした。

八月二十九日

とにかくいい天気。

今日は、保護者懇談会があるとかで、学校はお休み。でもナギおねーちゃんとユキタダは部活があるからって学校へ、リシギはバイトへ行っちゃつた。

蝉もうるさく鳴いている。さつそく勉強にとりかかる!

日本語漢字を覚えるなら、これほどピッタリのものはないよね!
ボクは、月曜日が休館日とも知らずに行つたあの図書館で、火曜日閉館二分前に行つて借りてきた熟語事典を片手に、そして、慣れてない漢字の読み対策に漢字辞書を控えにおいて机に向かつた。

【体たらく】

「えと……『カラダたらく』？ あ、タイたらく。うゝん……ゼン、
るべき、コウ、ヨウ？

自他の行為のうち、コウ……ましくないユウヨウ。コウましくな
い……？

コウましくないってどういう意味だ？ 辞書辞書。えゝと――」

あ、『desirable』の否定かあ。

コウましくないってのは、つまりは嫌いつてことなんだあ。

「ん？ 自分も他人も含めた行為で嫌い？？？」

やっぱわかんないや。次いこ、次。

【鉄面皮】

「テツ……ベン、ヒ。恥を恥とも思わない、あつ……コウ、かまし
い人をのしる言葉」

コウかましい？ さっきのコウましくないとどう違うんだろう？
ぬゝゝ、ムツかしい。

「鉄ベンヒはエト時代からある言葉」

へえ、エト時代から鉄があつたんだ。勉強になるなる。

【野太い】

「ヤ、タイ、い。まわりのハンノウなど気にせず、いつもハイゼン
としているさま。ト、タイ、い、と同じ。へえゝ」

鉄ベンヒもヤタイいも、『impuident』、『audacious』とだいたい同じ意味かな。

「むゝゝ、漢字ばかりで調べる時間がかかるゝ」

【馬鹿】

「えゝと……えつと……マー、ロク？ 愚か者としてののしる言葉。
語源は……ば、ボン、ゴの『moha』。漢字は当て字」

あれ？ これマンガとかでけっこう見る漢字だ。マーロクって読

み方だっけ？　なんか違う気がする……うん。

カチ　コチ　カチ　コチ　カチ　コチ　カチ　コチ

時計の音が急に気になって、ちょっと見上げてみたら、もうお昼を過ぎようとしていた。

「うわっ！　もうこんな時間？　おなかすいた。今日はなんのおかずかな？　おばちゃん……」

言いかけて、ボクはアツ、と口を手でおさえた。

まかないのおばちゃん、昨日から温泉旅行へ行っちゃってたんだ。おまけにキョーゴさんも今はヒナタとどっか出かけちゃったし。

今日のお昼ご飯は自分で用意しなくちゃいけないんだった。

「うあ、どうしよう……ボク黒い目玉焼きしかできないよう」

キッチンまで行って、何をどうしようかボクはウロウロしてしまふ。けれども、それでおなかが膨れるわけじゃなし、とりあえず冷蔵庫を開けようとドアに手をかけた。

「……そういえば、出かける前におばちゃんがなんか作ってくれたっけ」

急いで冷蔵庫を開けると、目の前にいきなりタッパーのなだれが押し寄せてきた。

「ぬあああああああ！？」

タッパーの波に流されたボクは、何も抵抗できずに冷蔵庫から数メートル離れたダイニングへと漂着した。

「……ついたた。どうしてあの小さな冷蔵庫にこんなたくさんのタッパーが入ってるんだよ！？」

「だいたいまー」

ナギおねーちゃんが部活から帰ってきた。

なにかいいことがあったのかな。おねーちゃんは笑顔満面だった。

けれども、ダイニングへ入ってくるなり、表情を変えて立つたま
んま動かなくなっちゃった。

「な、なんスカこれは!？」

「お、おかえりおねーちゃん……」

「クロカ!？　なに埋まつてるんスカ!？」

ナギおねーちゃんがカバンを放り出し、ボクをタッパーの海から
引き上げてくれた。

「これは一体なんなんスカ？」

「え、えつとね——」

ボクは自分の勉強の進み具合からお昼ご飯の心配まで、簡単にい
きさつを説明した。

「ねえ、あの冷蔵庫、絶対四次元ポケットだって!」

「そんなわけではないツスよ」

「ん……でも、まかないのおばちゃんが作り置きをタッパーに入
れておいてくれたのは助かるけど、どうすればいいのかボクわか
ないよ」

すると、ナギおねーちゃんはどんと胸を張り腰に手を当てた。

「そのことなら大丈夫ツスよ!　お昼ご飯、私がおばちゃんから頼
まれたツスから」

「えっ!？　おねーちゃんが!？」

「そのために今日は部活を早く切り上げてきたんスカらね」

——どうしよう……

主婦暦二十うん年のおばちゃん直伝とはいえ、おねーちゃんの料
理つてものすごく……その……一回食べれば忘れられない味なんだ
よね、いろんな意味で。

おばちゃんは、最初からねーちゃんに頼んでおいたみたい。

冷蔵庫の中の作りおきを調理して、テーブルに料理を並べていく
おねーちゃん。これ、ホントにボクとおねーちゃんだけで食べるの

かなあ……？

リシギとユキタダ帰ってこないのかなあ？

キヨーゴさん帰ってこないかなあ？

「ところでクロカ、今日は何してたんスカ？」

「日本語勉強してたの。辞書にいろんな単語あつて面白かった！」

「へえ、よかつたツスね。」

今勉強している日本語で、わからないトコがあればすぐに言うツスよ。協力するツス」

おねーちゃんが夏野菜のカレーをボクに差し出しながら訊いてきた。オクラとナスとカボチャがゴロゴロと入ってて、見るだけならホントにおいしそうなカレーなんだけど………なんか匂いがあやしい。どうしてラベンダーみたいな匂いがするんだろ………？

タッパーの中身、温めただけのはずなんだけど……。

「さあ、食べるツスよ」

「いた……いただきまーす……」

でも、ボクは食べるに食べられず、野菜を転がす。

「？ どうしたツスカ？」

ナギおねーちゃんは、平気な顔してカレーを食べてる。

「え……と……」

ボクはとにかく、カレーを食べなくていい方法を頭の中であれこれ考えて、

「あつ、ナギおねーちゃん！ 教えてほしい漢字があるの！ よく見る漢字で！」

言つて、ボクはダッシュでテーブルを離れ、熟語を書き写したノートを持ってきて見せた。

「こ、これ！ なんて読むの？」

「ん？ これはね……これは……」

おねーちゃんはちよつと顔を引きつらせる。

「……あの、クロカ。どんな辞書で調べたんスカ？」

一生懸命書き写した漢字を指さして訊いたけど、おねーちゃんは

汗を流しながらノートを返した。

「辞書？　ちよつと待ってて」

カレーを食べなくていいなと思って、辞書を取りに再び走る。持ってきた辞書の、教えてほしい単語のページを開いて見せるとナギおねーちゃんはその辞書の表紙を見て、口をあんぐり開けていた。

「ク、ククククロカ……この、本……」

「????　本がどーかした？　バリゾッコン辞典っていうの。日本語覚えるの、これが一番ハヤイってキョーゴさんが言っただよ」

「な、なんて辞書で勉強してるツスかああああ！」

おねーちゃんは、近所中に響く雄叫びをあげた。

「ただいま帰りましたー」

「キョーゴさんっ!!!!　クロカになんてことをー!!!」

その日の夕方、帰ってきたキョーゴさんにいきなりボディーブローを繰り出したおねーちゃん。

この辞書、そんなに悪いものだったのかなあ？

八月二十九日――続き

この夏休み、ボクが確実に覚えた熟語は『灼熱地獄』。

野菜カレーにトウガラシとシシトウとハバネロを丸ごと入れてキョーゴさんの口に押し込んでいくナギおねーちゃんと、辛さのあまりホントに火を噴くキョーゴさんを見て、ボクは思った。

その熟語は一生忘れられることはないだろうなって。

いくぞ第5話！線香は清く正しく使いましょう！

夏の夜。

昼間、耳栓をしてもものすごく熱心に生命の賛歌を聞かせてくるせみも、今は一休み。

静かにこおろぎたちの合唱が聞こえてくる。

つぶう~~~~ん

「……………つぶん！」

ばちん

ものすごい勢いで自分の腕を叩くナギ。刺されたと思しき場所をバリバリと掻きむしったあと、再び寝息を立てはじめる。

つぶ~~~~うううう

「……………んぬあ！」

べちい

今度は反対側の腕。

この蒸し暑い夜、ようやくとうとしかけていたナギだったが、
こともあるつか、あの害虫に妨げられていた。

ぶう~~~~ううう

「ふぬっ！」

ばきよっ

そのせいで、彼女は寝ぼけ眼ながらも、さつきから同じような行動を何度も繰り返しているのだ。

しかも、

どっつ

なんだか、

バリバリガリガリ

行動がエスカレートしていつてるようだ。

容赦なく襲うかゆみに、ナギは無意識のうちに爪を立てて掻き始める。こういうとき、爪で十字痕をつけることもかゆみ止めを塗ることも思いつかないのが悲しい。うつろな頭で思いつく、かゆみを抑える方法といえば、やはり本能に任せてかきむしるしかないのだ。しかしこれでは解決にはなりやしない。

つぶううううううう

「んきやああああ！」

耳元に急に接近してきた羽音。彼女は、不快が一気に上昇し、ばねのように飛び起きる。荒々しい息もおさまらず、じっとりとした寝汗に、くしゅんと一つくしゃみをする。

ふと見れば、もう足も腕も首元さえ蚊に蝕まれて、真っ赤になっていた。

「も、もおおー！ なんなんスカこの蚊は！ 鬱陶しい！」

ぷううう~~~~

「ぬぉぁぁぁ!」

我慢できなくなったナギは、押入れを蹴り開けて蚊取り線香の缶を取り出した。

虫除け蚊取りといえば、ニワトリ印の渦巻き蚊取り線香。

ナギは缶に入った蚊取り線香を驚掴みにし、なぜか目を閉じて闇と同化した。

「……………」

……ぷう~~~~…ん

「ふぁっ!」

ブーメランの如く、渦巻き蚊取りが飛ぶ。

超高速回転する線香は、音もなく宙を舞い、そして、

ぺちっ

蚊を後ろから撃破した。

旋回して戻ってきた線香を手にし、そこで無残に撃破された蚊を冷たく見下ろす。

「……これッス」

思わず不敵な笑みをこぼすナギ。

「やはり蚊取り線香は蚊を駆除してなんぼッスよ……………除虫菊の威力、思い知るがいいッス!」

もはや使用方法の間違いを指摘している場合ではない。ナギは蚊取り線香を次々と繰り出し、害虫を殲滅していった。

つぷあ~~~~…

ぷちっ

つうううつう

「ぬあん！」

ばちん

蚊とナギの戦闘は、空が白んでくるまで続けられた。

朝の7時半。学校へ行く支度中のクロ力は、歯磨きのために洗面所へ向かっていた。

「ふぁ、おふぁようナギおねーひゃん！」

「ん、おはようツス、クロ力」

洗面所で、歯磨きをしているクロ力とぱったり出くわしたナギが、彼の顔が、何かに気づいて少しゆがむ。ナギがその顔に気づいて、不思議そうに尋ねる。

「？ どうしたツスか？」

「おねーひゃん……んつと、その……」

さりげなく鼻に手を当てているクロ力の後ろから、これまたあからさまに鼻をつまんだユキタダが現れた。

「なんかスゲー線香の匂いがしないか？　なあ、ナギさん、クロ力

――」

ユキタダはクロ力とナギに視線を合わせる。

自分と同じように鼻に手を当てるクロ力。

そして、平然と突っ立っているナギ。

「……」

「……」

「……」

急に訪れる沈黙に、三人の間に気まずい雰囲気漂いはじめる。

「……さ、さてと」

それを最初に打ち破ったのは、ナギだった。

「私はまかないさん手伝って、ご飯の用意をしなきゃ！」
逃げるように去った彼女を見送る二人。

「……蚊取り線香の匂い、だよな？」

「カトリセンコー？ 昨日は先生と一緒に寝たの、ナギおねーちゃん？」

がつしゃあああん

ユキタダは勢いよく鏡に頭を突っ込んだ。

「どうしたの、ユキタダ？」

鏡にのめりこんだ彼を引っ張り出そうとするが、

「朝ごはんできたツスよー」

「あ、ごはんだ」はい」

朝食に呼ばれて、クロ力はさっさとリビングへ行ってしまった。
あとに残されたるは、流血だくだくのユキタダと、悲惨な現場と化した洗面所。

あとにキョーゴがきたときには、ユキタダのそばに死神らしきモノが見えたとか。

ちなみに、本日の朝ごはんとは弁当は、どこか線香の風味がしたそうな。

いくぞ第6話！ユキタダの優雅（？）な一日innサマー！

いつでもどこでも活動できる部、それがパソコン部だ。

彼の所属するパソコン部は活動時間さえ制限がない。

部員は彼唯一人。放課後はもちろん、休み時間でも授業中でも、パソコンで何かしているときは、いつでもどこでも部活動になるのだ。

部の活動内容は多種多様。

現在の活動内容は、オンラインRPGを自ら開発してみちゃったり、購買のおばちゃんのために商品一覧表を作成したり、新しいオンラインRPGのβテストに参加してみたり、学校で運営しているホームページを更新したり、オンラインRPGのゲームマスターになっていたり、生徒から頼まれた修学旅行のデジカメ写真をプリントアウトしていたり、オンラインRPGでダメ出しをしてみたり――

ようするに、今はネットゲーム中心の活動であった。

ここで一つ、皆の疑問を当ててみよう。

「なぜ、部員一人で廃部にならないのか」

簡単である。彼が高校の経営者に融資しているために、学校側は利益をもたらす彼の行動に規制を強いることを禁じているからだ。

――本人執筆中、「伝記・秋良ユキタダのすばらしき時代」より

とある夏休みの、とある日の、午後二時ちょっと過ぎ。

ここはひなた荘二階、僕、ユキタダの部屋。

僕は今日が締め切りの、ある物のまとめ作業をしていた。

その瞳はパソコンのディスプレイから一時も離れず、手はキーボードの上を滑るような速さで走らせ続ける。これからの時代、この程度はできないと仕事はやっていけない。

メガネのずれを少し直し、再びキーボードとディスプレイに集中しかけたとき、

「ういゝ、今日もこげん暑かとアスファルトで丸焼けになっちまうじょー！　ただいま帰ったッスー！」

ナギさんだ。部活から帰ってきたらしい。

いつもより「煌いて、夏in通学路」度が増している。ちなみにこの変な基準は、ナギさん自身がこの間設定していた。気温に比例して高くなるようだ。

「……ユキタダ、これユキタダのプリンッスか？　食べないんスかー？」

しまった、冷蔵庫を開けられた。プリンは、見つからないように一番奥に入れたのに。

「食べないんスかー？」

「食べるよー！　いーから置いといてよー！」

僕はドアを少し開け、ナギさんに聞こえるよう叫んだ。

「えー？　何か言ったッスかー？」

絶対聞こえないフリをしている。僕は叫んだのに。

——もしかして、狙いはこの部屋か！？

ひなた荘で唯一、エアコンを取り付けている僕の部屋。パソコン機器が置いてあるから無理やりつけてもらったんだけど、そのせいでみんなこの部屋に集まってしまって、僕の仕事は停滞気味だ。

電気代払ってるのは僕なのに。

「僕は仕事中だから！　後で食べるから置いといてくれってば！」

「え？　持ってきちゃったッスよ」

「おわあ！？」

いつの間に入ってきたのか、ナギさんの姿は僕の背後にあった。一般常識ではあり得ないだろう。僕はさっきからドアの前になのに、窓も鍵が掛かっていたのに、どうやって部屋に入るんだ。彼女は学校から帰ってきたままの格好で、手にプリンを持って立っていた。

「うわわわわ！？ ナギさん！ ここに入ったらダメだって！」
扉にもきちんとして貼る紙までしているのだ。

【怪電波の人、立入禁止。用事の際はノックすること】

と。

ナギさんが入ると、パソコンがいきなり爆発したり原因不明のザーバーダウンが起きたり修復不可能なまでにウィルスにやられたりして、手に負えない。このパソコン3台だって、つい先日買い代えたばかりなのに。ああ、もう変な音を出してフリーズしてる。

ちなみに、貼り紙が役に立ったことは一度もない。いや、彼女がいつも無視するから悪いんだ。貼り紙に罪はなかった。

「頼むからそこを動かなくてくれよ！ 今行くから！」

だがナギさんは、その一言が気に入らなかったのか、ムツとした表情になる。

「その物言いはひどいッスよ。せっかくプリンを持ってきたのに……」

今、プリンは関係ないと思う。

「あつ……！」

ガッずるべすやガシヤララ

足にコードが絡まり、ナギさんは豪快なこけっぷりを見せつけた。何をどうやったら足を踏み出しただけでコードがぐるぐる巻きつくのだろう。

とにかく、そのおかげでパソコンはことごとく電源がぶち切れ、周辺機器も机から落ち、あるものは破片が散り、あるものは使い物にならなくなった。唯一救われたものと言えば、

「——よかった、データだけは無事だ」

幸いにも、バックアップディスクは別の場所に保管してあったのだ。被害はハード面のみでなんとか食い止められた。

「いつもならバックアップまで全部ふつとばすんだよな、ナギさんは」

壊された機器を見ながら、ナギさんを横目で睨む。

「ごめんツス。」

でも、まあデータが無事でよかったツスね」

あっけらかんな謝罪。

反省という言葉を、どうやったら彼女に覚えさせることができるんだろう。そんな方法があるならノーベル賞ものだ。

「これ、買ったばつかなのに……………ナギさん、頼むからこの部屋には入らないでくれ……………ください」

漫画じゃないが、トホホと言いたくなってしまふ。

本当に勘弁してほしい。

僕は数百回目の頭下げをする。彼女もそれに応える。

「わかったツス。んじゃ次からそうするツス」

応えるだけだ。このセリフも数百回目。

こんなトコ、本当ならさっさと出て行きたいと思うところだけど、今はここを離れるわけにはいかないし。

考えたくもないけど、ここに在る限り、破壊は繰り返されるんだろうな。

それから少し経った午後二時十分頃

「ユキタダー！！ 見て見て！ これ新発売お菓子！ 『サル占いスナック』！ サルの脳みそ味とコンソメ味あってね、二つとも買ってたきちゃったー！！」

今度は無駄にやかましい奴が部屋に飛び込んできた。

「ゲツ！？ またっ……クロカ！ 前にも言っただろ、菓子を食い散らかすな！」

しかしクロカは人の話を聞いていない。

「あのねえ、コンソメもおいしいけど、こっちの方サバサバドバン！ な味！ おもしろいよ！ 食べてみて！」

差し出された袋を、僕はまじまじと見て、セロテープでお菓子の袋口を閉じた。

「ひなた荘はただでさえゴキブリやアリが入ってくるんだぞ！ こないだも、食べかけのお菓子をアリにやられてただろ！ 万が一ネズミまで入ってきたらどーする！？ コードかじって感電死したらネズミがかわいそうだろ！」

あえてクロカの同情を誘ってみる。予想はズバリ的中、クロカはハツとして、押し黙る。

「あっ……そっか」

「だろ？」

「そうだよ、そしたらネズミさんきつと苦しいよね」

俯き、しゅんとするクロカ。少し言い過ぎたかと思ったが、彼は急に顔を上げ、

「うん！ ボクもうここでお菓子食べない！ ネズミさん守る！」

選手宣誓のように片手を挙げて、嵐のように部屋を出ていった。

僕は返し損ねたお菓子を見る。

「……………『サルの脳みそ味』???」

しかも、サル占いはただのあみだくじで吉凶を選ぶものだった。

そしてさらに時は過ぎて午後二時半頃

扉の開けっ放しに気付いたのは、異様なまでの視線を感じたからだ。

扉へ目をやると、左半身を扉に隠してリシギが立っていた。

こちらをみている。

「……何？」

「……………」

視線はまるで「ユキタダがお菓子を部屋に持ち込むなんて珍しいな」とでも言っているように、机の横に置いたお菓子を見つめていた。

「……これ、クロカのお菓子なんだよ。悪いけど返しといてくれる？」

「……………」

彼は動かない。

「えーっと……こないだ頼まれたバイク用ナビに、超高性能音飛び防止付き万能ミュージックプレーヤー追加するからサ」

「……メモリー？ HDD？」

せめて、全身をこちらに見せて尋ねてほしい。なんで半分隠れているんだ。

「りよ、両方できるよ。それにMDやラジオ、希望ならCDとカセットもつけるよ」

僕が言つと、リシギはようやく全身を見せた。微動だにせずスライドしたように見えたのは、この際ににしないでおう。

「それよりも、ナビの画面と重量をもう少し小さくして」

ボソリと言い残し、お菓子を持って部屋を出て行った。

すげー心臓に悪い。無言で、しかも背後から目で訴えるのは、どうしてか絶対気づいてしまう。このひなた荘でまともなのは、やっぱり僕だけなんだろうか。

ようやく落ち着いてきた午後三時頃

「ストロップ！ ヒナタ、ここは入ったらダメだ！！」

扉を閉めようとしたら、キョーゴさんの愛猫が飛び込んできた。
気のせいかな少し濡れてるような……。

僕は慌てて外へ担ぎ出すが、このデブネコ、すごく重い。んでもって、やっぱりしつとり濡れていた。

「あ、ユキタダ君！」

そこへキョーゴさんが現れる。

「助かります！ そのままヒナタ捕まえててくださいい！」

「は？ はい」

飼い主のもとへ帰してやろうとヒナタを抱き上げるが、ヒナタはキョーゴさんの姿を認めるなり、僕の腕の中で暴れだした。

「うわ！？ こらやめっ……痛え！！」

腕を力いっぱい引っ掻かれた。そのスキに、ヒナタは僕の部屋の中へ逃げる。

「わあ？ そっちは……！」

「ヒーター！ 待ちなさい！！」

廊下の向こうから、キョーゴさんがすごい形相でこちらに迫ってくる。

「キョ、キョーゴさん！？」

よく見たら、泡だらけの顔で、割烹着姿で、猫用シャンプーと猫用ブラシを両手に持って……。あれじゃ逃げて当然だ。

「ヒナタを風呂に入れてたのか？」

「ユキタダ君！ 早くヒナタを捕まえてくださいい！！」

「わ、わかった！」

僕は急いで部屋に引き返した。

本当に早く捕まえないと、水に濡れたままのヒナタが、コードを

引っ掻きでもしたら……。

「ヒナタが感電しちゃう！」

「うわー！ ヒナタ！ おとなしくなさいー！！」

そして、その騒音を聞きつけたらしく、ひなた荘の全員が駆けつけた。

「ヒナタが死ぬの！？ ダメえええええええ！」

「ヒナタ、どうしたんスカ！？」

「……ヒナタ」

「うわっ！ みんな来んな！ 部屋がメチャクチャに……！」

だが時すでに遅し。あつというまに僕の部屋はひなた荘の面々によって破壊されていた。

「あ……ああ………」

僕の心の底で、グツグツしたものが込み上げる。

「……」

目の前に映し出されるは、愛する機械を破壊しながら、猫一匹を追いかける四人の姿。グツグツ煮えるものは、急激に上昇し頂点に達した。

っだあああああああん

僕の繰り出した一步は、床が抜けたと思わせるくらいの音だった。

「走り回るなああああああああ！！」

「……………」

急に訪れる静寂。

自分でも驚くくらいでかい声が出た。

みんな、ビタツと止まり、こちらを向く。もちろんヒナタも止まる。

「……てめえら、今僕が仕事してんのわかってんのか……？」

わなわなと尋ねる僕に、全員がコクリと頷く。

「まかないのおばちゃんに頼まれた、栄養成分とアレルギー関連の

原材料をまとめた表を作ってたんだぞ……！」

それには全員、きよとした顔をする。

「もつとおいしい栄養のあるものを食べてもらうためにつつて、僕に依頼してきたんだ！ それをお前らが潰してんだぞっ！！」

「え？ そーだったんスカ？ ネットゲームじゃなかったんスカ？」

息を切らせて怒る僕に、ナギさんだけがケロッと聞き返す。自分
は関係ない、僕はもうその態度が許せなかった。

「ノーテンキに聞き返すなあ！ この僕が二日もかけてたんだぞ！

それなのにめちゃくちゃにして——」

「うるさいツスねー。元に戻せば文句はないツスカ？」

「そーだよ！ 戻せるもんなら戻して——」

ばしゅうつうつ

そのとき、何が起こったのか、きっとナギさん以外誰もわからな
かったろう。

視界が急に真っ白になったかと思うと、次の瞬間には、めちゃく
ちゃだった部屋が元通りになっていた。

「……へ？」

机から引きずり落とされたパソコンも、引つかかれて使えなくな
ったプリンタも、真っ二つになった机も、びちゃびちゃになった床
も、全部が元のとおりになっていた。いや、破壊される前よりもキ
レイになっている気がする。

「これでいいツスカ？」

ひなた荘の面々を従えて、ナギさんが、仁王立ちでにんまりと笑
う。

僕の頭は理解に乏しくなって、声を出すのがやっとだった。

「あ、の……えっと……」

「そいじゃ、おばちゃんのためにがんばるツスよ」

何事もなかったかのようにスタスタと部屋を出て行く。

他のみんなも、さっきまでの出来事を忘れてしまっていた。
「……………どーなってんだ？」
だが、その問いに答えを出してくれる者はもういなかった。

世の中、説明のつかないことがあるとよく言われるけど、実際に目の前にしてみると、なんでもないことのように思えてくる。もうこの世の中自体が説明のつかないことではなからうか。科学でいくら探求しても、不思議はいつでももついてくる。
「……………はあ、哲学の勉強も始めてみようかな……………」
僕は、自伝記を書きながら、ため息をついた。

いくツス第7話！ビデオ見て、感激していた前編だい！

9月に入って、学校も始まりましたが、その次の日は土曜日なので、1日学校へ行ったら、またすぐお休みなんですよ。

リシギ君はバイトで、今日もいないんですが、ほかの皆さんはひなた荘でそれぞれ過ごされています。

だからなんでしょうか、今日は少し賑やかですねえ。

——朝寝坊をしてしまったキョーゴより

「うつ……うつうつ……」

リビングから聞こえる変なうめき声。しかも、一つでなく二つ重なって聞こえてくる。

——いくら古くてボロい……もとい、年期の入ったうちでも、幽霊やゾンビの類は住み着いてないはずなんですが——

そう思いつつ、キョーゴはヒナタを抱いてリビングに向かった。

「うつうつうつ……ズビィーッ」

近づくにつれ、だんだん声がはつきりしてくる。

うめきと一緒に、すする音までしてきた。

「……一体何の音ですか？」

キョーゴがひよっこりと顔だけ覗かせる。覗かせたすぐ目の前には、いつもの食卓があるだけで、誰もいない。

視線を左右に巡らせてみる。すると、

「うつうつ……じゅびりゅ」

テレビの前に、金髪と中途半端なポニーテールがいた。一人はハンカチを、一人はティッシュ箱を抱え、交互に鼻をすすり、ボロボ

口涙を流していた。

「……な、なにやってんです？」

「あ、キョー……ズビツ……ゴ、さ……」

彼に気づいて、ナギが振り向く。

「ぎっ——！」

その顔はもう涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。

何度もハンカチを当てたせいで真っ赤になった鼻。とめどなく流れる涙ですっかり腫れ上がった瞳。

人相が変わったといってもおかしくない顔に、キョーゴは出かかった悲鳴を必死に抑えた。

「……………ナ、ナギ、さん……………あの、その、さすがの私もツツコミそうになるんですが……………とりあえず、なんで泣いてるんですか？」

やつとのこととで声を振り絞り、四つんばいになって近づく。いつもの顔とのギャップに、腰が抜けたらしい。

彼女の隣で、クロカも鼻水を懸命にティッシュでふき取る。

「うあ……………キョーゴ、しゃん……………この映画……………しゅごいカンドーなの〜」

「映画？」

クロカは、クシャリとティッシュを丸め、それを持ったままテレビを指差す。つられてキョーゴがその先を見ると、

『争うなんてもうやめろー！』

『彼も……………そして私たちも、みんな同じ世界に住む生き物なのよ……………』

最新CGによる爆風、そして崩れ落ちる巨大な建物。

——最近のアニメは本物みたいで迫力がありますねえ
というのが、最初に思ったキョーゴの感想である。

しかし、アニメはアニメ。もういい大人のキョーゴは、ナギの感

情移入っぷりに呆れてしまった。

「クロカ君ならともかく、ナギさんまでそんなに泣くほどじゃ——」

ごきやつ

瞬間、キョーゴの体から嫌な音がして、彼はぱたりと倒れた。

「何言ってるんスカ！ このアニメをバカにしちゃだめツスよ！

一回死ぬツスカ！？ 子供からやり直してみるツスカ！？」

「（いや……もう死にかけ……）」

生死の境で必死に訴えるキョーゴ。一瞬だったが、ナギに背中をやられて、本来なら曲がらない方向に背骨が曲がってしまったらしい。

それさえも、ナギにとってはアリの迷子を見ている程度にしかないようだ。

彼女は、再びテレビに見入り、感動のクライマックスに号泣する。
「ううううう……泣けるツス！ やっぱ感動ツス——！」

同時に、クロカもティッシュを消費するスピードが2倍になった。
「ナギおねーちゃん……ぐしゅつ……ティッシュなくなっちゃったよう……新しいの出していい？」

「OKツス！ もおどどん泣くといいいツスよ！ 捨てたティッシュの分だけ感動が雨嵐ツス！」

そういつて、自分はハンカチを思い切り絞りだす。一体どれだけの涙を吸っていたのか、ハンカチは何度絞っても、湧き水のように水分を出し続けていた。

そして——

エンディングまで終わり、ビデオを巻き戻し終えたナギは、新しいハンカチ片手に、リモコンの再生ボタンをポチリと押した。

いくッス第7話！ビデオ見て、感激していた前編だい！（後書き）

……よく考えたら、腰抜けてしまった場合、四つんばいにもなれないですね……。

いくツス第7話！ビデオ見て、感激していた後編だい！

僕は高校生だけど、これでもいろんな仕事を請け負っていて、テレビなんか見る暇はないんだよ。

それなのに、クロカがまた部屋に不法侵入してきてコードを引きちぎるもんだから――。

とにかく、そのせいで、一日で終わる仕事が一カ月も遅れてしまっ
うハメになったよ。

――ひなた荘の家賃約七百年分に相当するスパコンの修理代を支払
った直後のユキタダより

「ユキタダも使う？ ……ぐすっ……すん」

「あー僕はいいから、クロカ、鼻水拭けよ」
うっとおしいから。

今、目の前で泣いているクロカとナギさんはものすっごくうっ
とおしい。

おまけに、何があったか知らないが、何をされたか大体想像のつ
く格好で、キョーゴさんがリビングの隅に転がっていた。

「なあ……ナギさん、とりあえ――」

「なんスか！？ 今いいとこなんスよ！ 黙るツス！」

――ギヤース！

恐竜が吼えるような、そんな効果音がピツタリなナギさんの顔つ
き。

怖い。つか、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で睨まれた。

もしかしたら、似たようなことをしてかしてキョーゴさんはあ
なっただのかもしれない。

僕は、ちらりと肩越しにキョーゴさんを見る。

おそらく腰を強打したのだろう、うつ伏せながらも腰だけは高く上げてそのまま動かないでいる。――いや、動けないのだろう。ところで、さっきから二人が邪魔をしてテレビが全然見えないが、一体何を見ているんだろう。

――何を見て泣きまくってるんだ？

聞こえてくる効果音から、見ているものはアニメのようだが、最近のアニメはどれも放送時に、『明るいところでテレビから離れてみるように』とテロップが出ているにもかかわらず、あの二人は画面から30センチも離れていない。

泡吹いても知らねーぞ。

そう思いながら覗き込んでみる。

ビデオデッキに電源が入っているのが見えた。どうやらビデオでアニメ映画を見ているようだ。

『生き物って、痛いときに泣くものでしょう。けれど、痛いとき意外で泣くのは人間なんだって』

『悲しくて泣くのは、人間だって』

「うううう……ぐしっぐしっ」

デッキの時計を見て、物語が始まって数分と経っていないようなのに、もうボロボロ泣いている。

こんなんでどこが感動できるのか、僕にはよくわからない。

『なんだか、お別れがきたみたい……』

「つか……これ、なんとかモンってやつ映画？」

登場人物に少しだけ見覚えがあった。二、三日前だったか、新作映画のプロモ集作成で、資料として渡された山の中に混じっていた気がする。

「うじゅ……ユキタダも知ってたの？」

「やっぱ、シリーズの新作よりも、この一番最初のが感動ツスよ」
「アニメだけどすくいい話なんだよおう」

「テーマが重いんスよ」。子供向けなのに、すごい感動できるんス」

「しかもエンディングも歌がいいんだ」

交互に映画を褒めちぎる。二人の、この映画に対する熱の入りようはよくわかるが、よくわかったということにするから、泣くか鼻をすするかしゃべるかのどれか一つにしてほしかった。

「それでこんな古いの見てたんだ。でもさあ、これ、最新の映画の方がCGとかが——」

ドゴツ……バキョキョキョ

「何を言うツスカ！ 技術の問題じゃないんスよ！！」

「そーだよキタダ！ この映画の良さが力ワってないよ！」

ユキタダの身に何が起きたか、おそらく本人もわかっていないだろう。

あの瞬間、ナギの繰り出した瞬殺拳が彼の腹部にヒットした。もちろん、彼女なりの手加減があって腹部に攻撃がされたのだろうが、それでも破壊力は相当のものであったらしい。

攻撃を食らい彼は吹っ飛び、壁を突き抜け外へと飛ばされてしまった。

当然、無事なはずがないだろう。

彼が飛んだ先は、土煙がたち込め、視界がさえぎられてなにがなんだかわからなくなっていた。

——数分後。

もくもくとした土色の煙はようやくおさまったが、無残に横たわるユキタダがそこにいた。

「（ああ……ユキタダ君、ご愁傷様で……）」

部屋の隅で、同情の涙を流すキョーゴ。

「うわあああ！　すごいかっこいいー！」

「キヤー！　あぶなっ、当たる！　左っ……逃げてー！」

そんな哀れな骸二つをよそに、クロカとナギはその日一日、ずっと感動を叫び続けていた。

余談。

あれから外に放り出されっぱなしだったユキタダは、深夜、バイト帰りのリシギに運良く見つけてもらい、軽い怪我ですんだが、運悪く風邪をひいて、三日三晩寝込んだという。

いくね第8話！通学は戦いなさ気を抜くな！

今日は朝からナギさんが核爆発的に元気なんです。

いえ、それはいつものことなんですが……なんていうか、目が合っただけで魂を抜かれそうなほど気合いが入ってるというか……。

いったい、何があつたんでしょう。

——首にヒナタがのしかかり暑苦しく窒息死しそうになったキョーゴのつぶやきより

「起きるツスよー！ 起きらば起きて飯を食えーツス！」

台所で仁王立ちし、ベタにフライパンをお玉で打ち鳴らしているのはナギだ。

いや、ベタでも、ナギが叩けば騒音を通り越して公害へと飛躍的なレベルアップを果たす。

最初、外で爆弾が次々と爆発しているのかと誰もが思い、ひなた荘の住人どころか、町中の住人がいつせいに起こされたくらいだ。

「うー……おねーちゃん、まだ七時だよーう」

まだ眠っている目を擦りながらリビングに入ってきたのは、パジヤマ姿のクロカだ。

彼女の公害モーニングコールにもかかわらず、ようやく脳が覚醒し始めたような表情。彼にとっては、耳元で囁かれた程度にしか感じていないのだろう。

鉄の鼓膜を装備しているとは思えない。

ウサギがよほど好きなのか、パジャマの模様も手に持つぬいぐるみもスリッパもウサギだった。

「何言ってるツスカあ！ 今日は何月何日何曜日だと思ってるんスカあ！」

言って、ナギはカレンダーをバシリと叩く。

クロカと同じく、騒音などはじめからなかったような顔でキョーゴとリシギも起きて来て、ナギの叩いた先を見る。

一枚に一月分の暦がかかれたカレンダーは、秋の雰囲気を取り除いた九月になっていた。

ナギの指先は、第一日曜日を示していた。

「ああ、今日は『よいこのアニメスペシャル』がありますね」と、キョーゴ。

「そうそう、朝十時から五時間超スペシャルなんだよね」

「……録画」

「ちっがーう！ それは昨日ツス！ 今日、げつ・よう・びツス！」

ナギは改めて月曜日を指した。
何度も勢いよく指しすぎて、カレンダーには壁ごと貫かれた穴がいくつもあく。

「ああ、そういえば夏休みはもう終わったんでしたっけ」
「そうツスよ！　そして今日は始業式ツス！」

「え？」

——確か、先週の土曜が始業式だった気がするんですが。

「うつしやあああ！」

口にしようとしたキヨーゴの疑問は、ナギの無意味な気合い入れのパンチによって吹っ飛ばされた。

「学校へ行くツスよー！！　全員戦闘準備ツス！」

言うなり、ナギは朝食にと作られたおむすびをみんなの口に投げ込んだ。

飲み込みきれずむせたキヨーゴには、ニラと麴のみそ汁を熱々の状態で流し込む。

制服を頭から被せ、かばんを顔に押し付けると、ナギはリシギ、クロ力を玄関前に並ばせた。

約一名、二階の廊下で瀕死になっている人物に気付いたのはその頃だ。

「……な、なんださっきの爆発音……！　僕の発明を狙ったテロか？」

ユキタダが、痛む耳を押さえつつ階段を這って降りてきた。
「そっちの方がまだマシだったかもしれないね……」

赤く腫れあがった口で、キヨーゴは憐れみをこめて言った。

「今日の通学路はまさに戦場ツス！ みんな、褌ふんどしを引き締めて行くツスよ！」

『お………』

眠気とだるさと、学校へまだ行きたくない気分がまだ抜けない全員の掛け声に覇気はない。

ナギは、疑問系でもう一度号令した。

「……行くツスよ？」

『オオオオオオオオオ！！』

その一言で何の恐怖をみたか、みんな、全身全霊で声を張り上げる。

ところで、通学路が戦場とはどういうことなのか。それにはまず、彼女の特異体質について語らねばなるまい。

彼女は生来、人の闘争本能を刺激するオーラが強く、もれなく闘いを挑まれるという稀な体質の持ち主だ。

しかも、挑まれた闘いは必ず受け必勝しているものだから、不良学生はもちろん、ヤクザやプロ格闘家の間にまで伝説となっている。

とにかく、彼女の『かかってこいや』オーラは、老若男女問わず、必然的に敵を作り呼び寄せてしまう。

これは、彼女が未知数の力を秘めているための副作用だと研究者

——ユキタダ一人だけだが——は語っている。

オーラの強弱は、感情に左右されるようだ。

特に休み明けなど彼女のテンションが高まる時期はオーラが特に強いらしい。

そんなオーラの持ち主に、夏休み明け久々に会おうものなら、人は興奮を抑えきれず、闘いこそ宿命だといわんばかりに挑んでくるだろう。

故に、『通学路は戦場』なのである。

「さあ！ みんな戦闘準備はいいツスカ！？」

『おう！』

リシギは予備を含め二本の竹刀。

ユキタダはいつもの発明ボックスを背負い、コントローラーを手にする。足には改造したローラーブレードを装備。

クロカはナギの支えるママチャリの荷台に乗っかる。

ナギは自転車の横に立ち、まっすぐに前方を見据える。

「敷地を出た瞬間から戦いは始まるツス！ ユキタダ、レーダー反応は！？」

言われずとも、ユキタダは頭上のレーダーを回転させ、モニターで敵の数を把握する。

「通行人含めてざっと百二十。さすがだね、みんなうまく隠れてるけど、この程度なら問題ない」

「一番近くの敵は？」

「前方二時の方向十二メートルに五人！」

「うつしやああ！ 先手必勝！ 喰らえっ、まかないのおばちゃん特製コッショウウばっくだーん！」

大きく振りかぶって、大リーグを彷彿とさせるフォームで灰色の球を投げる。

壁に当たった球は、パンと音をたてて破裂し、灰色の煙を一带に生み出す。

曲がり角の向こうに隠れていた五名は、煙り出されてそれぞれの打ち回った。

ある者はくしゃみを連発し、ある者は涙目で必死に目をこする。

「さあ、いくッス！」

ナギは、後輪を幾らか空回りさせて勢いよくこぎ出す。後ろからは、リシギとユキタダがついて行き、さらに後方から隠れていた生徒たちが一斉に飛び出す。

「ナギさーん！」

「総寮寺いつ！」

『勝負だあああああ！！』

無限に高まるテンション。ほとはじ 進むオーラ。

来る者は全て蹴散らせといわんばかりに、自転車で敵を薙ぎ倒していくナギ。

通学路を少し進んだところで、ナギは自転車の向きを反転させ、急停止する。

「さあ、私はここッスよ！」

荒波のように押し寄せてくる生徒の群れを挑発するナギ。

打倒ナギを志す波は、六一・七パーセントが男子、三八・二パーセントが女子、残り〇・一パーセントはオカマという成分でできていた。

ほとんどが学校の生徒で、運悪く通りかかった人たちもナギのオラで次々と戦士へと変わっていった。

その荒波から、黄色い光が飛び出す。

「ナギおねーちゃん！　なんか飛んできた！」

「ひゅうつ！」

クロカの言葉に応え、ナギは自転車を急発進させる。

後方で、彼女らの代わりにユキタダが思いつきりそれを踏む。バナナの皮だと知った時には、彼は波の彼方へと消えていた。

「ちいっ！　レーダーを失くしたッス！」

後ろを一瞥し、舌打ちする。

さらに加速するナギの自転車。

コンクリートとタイヤが激しく摩擦し、砂ぼこりにまぎれて煙が噴き出していた。

「眠い……」

リシギがあくびしながらもナギの速度についてくる。

ナギがこぐ自転車の異常なスピードでもまだ余裕を見せられるのは、剣道部で鍛えたからなのだろうか。

眠たそうなりシギに、ナギは後ろを指差して叫ぶ。

「だったら目を覚ましてくるッス！」

ナギはリシギを蹴飛ばし、後方へ追いやる。
ゴングロゲンゲレと転がるリシギ。

「さあ、行くッスリシギ！ あいつらを全部ぶちのめしてくるッス！」

「……何気に酷いね……おねーちゃん」
あまりの転び様に、さすがのクロカもぼそりと突っ込む。

しかし、蹴飛ばされたにもかかわらず、むくりと立ち上がった彼は無傷だ。

今にも睨が上下くつつきそうだったのに、敵を迎え撃てという言葉葉を聞いた途端、彼の脳は覚醒した。

「ぶちのめしていいんだな……」

予備の竹刀を腰に差し、押し寄せる波に向けて構えた。

「おねーちゃん！ 前から来るっ！」

バナナの皮で古典的に散ったユキタダに代わり、レーダー役をしていたクロカは、前方の敵を感知する。

金髪が一瞬、アンテナのように立ったのはきつと気のせいである。

その声に反応するように、待ち構えていた生徒たちが、二人の前

に立ち塞がった。

「クロカ、しっかりつかまってるツス!」「うん!」
ナギは、スピードを緩めるどころか、さらにギアを重く切り替えてスピードを上げる。

道に転がる石ころを踏切に自転車は跳躍し、人の背を軽々と越えてしまった。

「ざまみろツス!」

だが、どこからか投げられた石が自転車の後輪に当たり、バランスを崩された。

自転車は着地に失敗し、脱出したナギに蹴られ大破してしまった。彼女はクロカを背負って軽やかに着地する。

その隙を生徒たちは見逃さない。

あつという間もなく、ぐるりと取り囲まれた。

逃げ場を失い、ナギとクロカは背中合わせになる。

「自転車、壊れちゃったね」

「むう、ちょっと痛いツスね……明日から通学がメンドーになりそうツス」

二人を狙うその数、およそ二百。

学校へ近付けば近付くほど、敵の数は増えていく。

そんな状況で本当に学校へいけるのか。

「メンドーつつたって、ナギは来る奴全員一撃でのしてるじゃねーか……」

囲まれた群れのさらに外側から、眠そうな声が聞こえた。
全員が思わず振り返り、包囲網に切れ目が入る。

通学路のあちこちに累々と横たわる死屍。

すべては、目の前に立つ二人の男によってなされたことだと敵は本能で知る。

「運動にもならなかった……やっぱ眠い」

竹刀をブラブラと振り、リシギはまたあくびをする。

「誰だ！ バナナの皮を投げた奴あ！ まだ半分以上実が残ってたじゃないか！ 食いモンは大事にしろー！」

生徒の波に吞まれて散ったはずのユキタダは、皮と実にまみれて壊れたローラーブレードを見せつける。

ツツコミどころはそこ……と、全員が内心つぶやいたのはいわずもがな。

「二人ともやつと来たツスカ」

「あつははは！ ユキタダバナナ」

二人の帰還に、ナギとクロカの萎えかけていた闘争心に火がついた。

ナギは隙を突いて襲ってきた男子生徒を蹴り飛ばし、クロカはユキタダを笑うその表情で女子生徒のハートを射抜く。

「そんじゃあ、一気に殲滅戦といくツスよー！」

「おう」

「まっかせて」

「愛機の恨みー！」

再び集結した四人は、次々と湧き出す生徒を相手に、再び激しい戦闘を始めた。

時は、八時二十五分。

予鈴の鳴り響く校門にひとりたたずむ男の姿が見える。

校舎は恐ろしいくらいに静まりかえり、人の気ひとつ感じることもできない。今なら、改築二年の新校舎も廃墟に見える。

そこへ、若い男性教師が駆け寄ってきた。

この学校に赴任して五年、ようやく馴染めてきたところである。

「校長先生、近所の話だと、やっぱりひなた荘からの通学路で乱闘が起きているそうです」

「そうか、そうか」

校長はにこにこ笑顔であった。

それが素なのか、微笑ましくしていることなのか、男性教師には判断がつかなかった。

「みんな、今年も遅いの……」

校長はにこに顔のまま、生徒が来るのをずっと待ち続けた。

「ああ、どうしましょう？ 土曜日も同じことがあって始業式が今日に延期されたのに……」

「なあに、気長に待つとれば、みんな登校してきますよ」

校長はににことひたすら、ただひたすら生徒を待ち続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8840a/>

ひなた荘はナギの如く！

2010年10月8日22時26分発行